



# 京大広報

No. 574

2002. 12

## 目次

### 大学の動き

- 平成 15 年度大学入学者選抜  
大学入試センター試験の実施.....1360
- 京都大学広島講演会を開催.....1360

### 部局の動き

- 福井謙一記念研究センター  
開所記念式典・記念講演会・披露会.....1361
- 国際融合創造センター,  
田中耕一氏を客員教授に招へい.....1361

### 栄誉

- 常脇恒一郎名誉教授が  
文化功労者に選ばれる.....1362
- 柳田充弘生命科学研究所教授が  
紫綬褒章を受章.....1362
- 医学教育等関係業務功労者の表彰.....1363

### 寸言

- 私の京大時代 異 外夫.....1364

### 随想

- 歴史的機器の保存について  
名誉教授 加藤利三.....1365
- ポストク考 名誉教授 鬼頭 誠.....1366

### 洛書

- らくがき ? ? ? ?.....1367

### 資料

- 平成 14 年度京都大学市民講座講演要旨.....1368
- 平成 14 年度教育改善推進費  
(学長裁量経費)による研究課題.....1371

### 日誌

- 日誌 .....1373

### 訃報

- 訃報 .....1374

### 公開講座

- 終了報告 -

- 教育学研究科附属臨床教育  
実践研究センター公開講座.....1374

### 話題

- 花山・飛騨天文台同時一般公開を実施.....1375
- 総合博物館, コンサートを開催.....1376
- 経済研究所創立40周年  
記念シンポジウムを開催.....1376
- 原子炉実験所,  
アトムサイエンスフェアを開催.....1377

### お知らせ

- 「白馬山の家」の冬季開設.....1378

### 編集後記

- 編集後記 .....1378

- 民族学校出身者の京都大学への受験資格に  
関する最終報告について(別冊).....1379



京都大学ミュージアムコンサート  
- 関連記事 本文1376 ページ -

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 大学の動き

### 平成15年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成15年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成15年1月18日（土）及び19日（日）の両日に実施される。

このため、本学では1月17日（金）の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

#### 1. 期日及び試験教科

1月18日（土）

外国語，地理歴史，数学Ⅰ，数学Ⅱ

1月19日（日）

国語，理科Ⅰ，理科Ⅱ，公民

#### 2. 試験場及び受験者数

農学部試験場（北部構内）

法学部・経済学部試験場（本部構内）

工学部試験場（本部構内）

総合人間学部試験場（総合人間学部構内）

医学部試験場（南部構内）

薬学部試験場（南部構内）

関西文理学院試験場

受験者数 5,988人

### 京都大学広島講演会を開催

さる11月22日（金），広島市内のホテルにおいて地域講演会を開催した。この講演会は，平成9年の創立百周年を契機として，京都大学の更なる情報発信を図るため，京都市以外の全国各地域において開催している事業であり，今回で10回目となる。長尾真総長の挨拶「京都大学の魅力」に続き，森谷敏夫人間・環境学研究科教授の「生活習慣病と運動 - 生

涯現役のためのおもしろ健康科学 - 」と題する講演があり，生活習慣病を予防するための運動の必要性をユーモア交えながら，スライドを用いて説いた。会場には本学卒業生（広島京大会），一般市民，高校生ら約450名が参加し，メモを執るなど熱心に聞き入っていた。



森谷教授による講演



## 部局の動き

### 福井謙一記念研究センター開所記念式典・記念講演会・披露会

本年4月に学内措置により設置された福井謙一記念研究センターの開所記念式典、記念講演会及び披露会が10月28日（月）に行われた。

記念式典は、故福井謙一博士夫人の友榮氏をはじめ学内外の関係者約200名の出席を得て午後1時30分から同センターで行われた。森島 績センター長の「異なった分野が出合う融合の場として発展していきたい」との式辞で始まり、長尾 真総長が「福井先生のご遺志に報い、ここを拠点に多くの若手研究者に活躍してもらいたい」と挨拶の後、館 糾鐘淵化学工業株式会社相談役、西島安則京都市立芸術大学長（元京都大学総長）から祝辞が述べられた。

式典に引き続き行われた記念講演会では、諸熊 奎治米国エモリー大学化学科教授による「基礎化学の挑戦 複雑系の高精度計算に向けて」、河内 哲住友化学工業株式会社専務取締役による「産業界が基礎化学に期待するもの」と題した講

演が行われた。

また、会場を京大会館に移して行われた披露会では、吉川 晃文部科学省研究振興局学術機関課長、米澤貞次郎京都大学名誉教授の祝辞に続き、金田章裕副学長の発声で乾杯、新たなスタートを切った同センターの発展を祈念した。

（福井謙一記念研究センター）



### 国際融合創造センター，田中耕一氏を客員教授に招へい

国際的視野に立ち、新たな形の産学連携の推進及び学問分野の融合による独創的な研究の進展を目指

している国際融合創造センターでは、ノーベル化学賞の受賞が決まっている株式会社島津製作所の田中耕一氏を12月1日から客員教授として迎えることになった。

（国際融合創造センター）



総長と記者会見をする田中氏

## 栄誉

## 常脇恒一郎名誉教授が文化功労者に選ばれる

常脇恒一郎名誉教授が平成14年度文化功労者に選ばれました。

以下に同名誉教授の略歴，業績等を紹介します。

常脇恒一郎名誉教授は，昭和28年京都大学農学部農林生物学科を卒業，次いで，同30年京都大学農学研究科修士課程（農林生物学専攻）を修了，博士課程に進学されたが，同年米国に留学し，同国カンサス州立大学大学院博士課程に編入学，同33年同課程（遺伝学専攻）を修了し，Ph. D. の学位を修得された。昭和34年までカナダマニトバ大学においてポストドクトラルフェローとして研究に従事して帰国，国立遺伝学研究所（生理遺伝部）の研究員に採用され，その後室長に昇任された。昭和40年京都大学農学部助教授に移り，次いで，同41年教授に昇任、農林生物学科実験遺伝学講座を担当された。平成6年停年により退職され，京都大学名誉教授の称号を授与された。この間，評議員及び大学院審議会審議員を務め大学の管理運営に寄与された。

本学退官後は，平成6年から福井県立大学生物資源学部教授，同10年から同大学学長に就任され現在に至っている。

同名誉教授は，研究面では，有用植物の遺伝学，特に，コムギの遺伝，進化，育種に関する分野において多くの重要な業績を挙げた。その主要なものは，



「比較遺伝子分析」，「細胞質ゲノムの比較研究」，「異種細胞質の育種的利用の基礎研究」，「細胞質ゲノムの分子遺伝学的研究」，「核ゲノムの分子遺伝学的研究」で，その成果は同人の多数の編著書及び学術論文として公表され，国内及び国外の学会において広く知られている。これらの研究成果の一部，「Comparative gene analysis of common wheat and its ancestral species」と題する論文に対し，昭和40年3月京都大学農学博士の学位が授与された。また，「小麦の起原と系統分化に関する比較遺伝学的研究」に対して日本農学会より昭和53年度日本農学賞（読売農学賞）が，「コムギおよびエギロプス属における細胞質ゲノムの遺伝的多様性」に対して日本遺伝学会より平成4年度日本遺伝学会木原賞が授与された。また，平成8年に米国科学アカデミー外国人会員に選ばれている。

これらの業績に対し，同名誉教授は平成7年に紫綬褒章を，同9年に日本学士院賞を授与されている。このたび長年にわたるコムギ遺伝学における輝かしい業績と人材育成に寄与された功績が評価され，文化功労賞者として顕彰されたことは，誠に喜ばしいことである。

（大学院農学研究科）

## 柳田充弘生命科学研究所教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより，柳田充弘生命科学研究所教授が，11月3日に紫綬褒章を受章されました。

以下に同教授の略歴，業績等を紹介します。

柳田充弘教授は、昭和39年3月東京大学理学部を卒業し、同45年同大学院理学系研究科において理学博士を取得された。その後には、スイス国ジュネーブ大学、イタリア国ナポリ市国際・遺伝生物物理学研究所、東京大学医科学研究所、米国メリーランド州立大学等において研究に従事され、同46年京都大学理学部助教授となり、同53年教授に昇任された。その後、平成7年大学院理学研究科に配置換え後、同11年遺伝機構学講座担当として新設された京都大学大学院生命科学研究科に配置換えとなり、同13年国立遺伝学研究所細胞遺伝研究系教授を併任し、現在に至っている。



柳田教授は、永年にわたって子孫細胞への遺伝情報伝達において中心的役割を担う染色体分配機構の解明に貢献された。単細胞真核生物である分裂酵母に早くより注目され、遺伝学、分子生物学、細胞生物学にわたる先駆的な解析技術を自ら開発・駆使することで、遺伝情報伝達に関わる数多くの因子を新規に同定され、さらには、因子間の相互作用を介して遺伝情報の実体である染色体がどのように機能するかを明らかにされてきた。研究開始当初は、ほと

んど未解明であった本現象が、今日我々が理解するまでに明らかになった過程には、同教授の貢献が大であることは世界中の研究者が等しく認めるところである。また同教授は、本学理学部、理学研究科、生命科学研究科の学生に対して常に真摯な教育を施され、その門下より国内外の一流研究者が数多く輩出されている。

柳田教授は、また生命科学研究科の創設に尽力され、平成13年度よりは研究科長としてその発展に貢献される一方、同11年より2年間日本分子生物学会会長を務められ、さらには、数多くの国際学会を主宰し、公的委員を務められる等、学内外、国内外における教育研究行政、学会活動、研究交流に多大な貢献をされてきた。これら貢献に対して、平成12年東レ科学技術賞、同13年朝日賞、同14年上原賞が授与され、また、同7年ヨーロッパ分子生物学機構(EMBO)外国人会員、同12年英国王立協会外国人会員にも選出されている。

以上のように、同教授が、研究者として分子生物学の発展に世界的な貢献をされる一方、教育者として多くの優秀な人材を育て、さらには学術文化行政にも尽力されてきたことが評価され、本年度の紫綬褒章を受章されたことは、誠に喜ばしいことである。

(大学院生命科学研究科)

## 医学教育等関係業務功労者の表彰

岡花民子技官(医学部附属病院前任看護助手)、黒田 茂技官(医学部附属病院主任診療放射線技師)及び片山 清技官(医学部附属病院医療機器操作員)は、医学に関する患者診療等に係る補助的業務に関して顕著な功労があったことにより、11月26日文科科学大臣より平成14年度医学教育等関係業務功労者の表彰を受けられた。

(医学部附属病院)



岡花民子氏



黒田 茂氏



片山 清氏

## 寸言

## 私の京大時代

巽 外夫



私が京都大学法学部に入学したのは太平洋戦争の激化する昭和18年10月でした。戦時中の特例として旧制松江高等学校を2年半で繰り上げ卒業し、9月に京大を受験。10月1日に入学式を済ませると、早速翌日から鉄砲を担いでの行軍が待っていました。上賀茂から高野川上流、大文字山や比叡山へと行軍に明け暮れる日々。夕方、行軍を終えてからの乾パンを皆楽しみにしていたものでした。丁度その年から法文系学生の徴兵猶予が停止されたため兵役につくことになり、私は長兄が任官していた海軍を志望し、12月10日には舞鶴海兵団へと配属となりました。その後、視力の良かった私は航空隊任務となり、19年1月に土浦航空隊、4月には徳島海軍航空隊へと転配され、9月に少尉に任官。特攻に配属されたのです。

徳島に配属されて間もなく、7月のある日、私は兄の夢を見ました。夢の中で兄は、「父母を頼む、父母を頼む」と繰り返し私に告げるのです。心配になった私は実家に「兄貴は大丈夫か」と手紙を書きました。その時の返事は「元気なはずだ」ということでしたが、後になって、私が夢を見た頃、兄の乗った飛行機が撃墜されていたことが分かりました。商工省勤務が内定していた長兄の死を父母は大変嘆き、また弟の私を絶えず気遣ってくれた兄の死は、私にとっても喻えようもなく辛い出来事でありました。

特攻配属のうち復員できたのは110名。ほぼ半数が死んでしまいました。亡くなったのは特攻出撃と、練習中の事故。事故も大変多かったのです。

私自身も、練習中に何度か死にかけました。特攻訓練は夜間飛行が中心でした。当時の飛行機にはレーダーはありません。また、街明かりを頼るうにも、空襲に備えた夜間照明禁止のため、周りは文字通り真っ暗闇です。その中で、低空で飛ば訓練をす

るのです。どこをどの高さで飛んでいるのか、海面と空の区別すら定かではない状態で飛んでいると、不意にエンジンが不調になり、高度が低下。海に墜落かと思った刹那、エンジンが盛り返し、九死に一生を得たという経験もありました。

私の特攻の順番は昭和20年の9月か10月ということでした。まさに明日をも知れぬ命だったのですが、終戦で出撃を免れました。当時特攻命令を決定する上官が「戦争が終わった後も日本は残る、国を支える人材を残してやりたい」と苦衷の真情を吐露されていた姿が今更ながらに思い起こされます。

終戦と同時に航空隊員は真っ先に殺されるとの噂が流れ、「すぐに家に帰れ、自分の飛行機を使ってよし」との指令が出されたため、8月20日、私は小松航空隊まで軍用機で飛び、福井の実家に帰りました。

20年の秋には大学が始まりました。多くの教授陣が早速に気概溢れる講義をしておられ、新時代の息吹を感じたものであります。しかし、私は、こんな経験をした直後で、また、敗戦のショックが大きかったこともあり、学問一筋という気にもなれず、卒業まで試験の時以外の殆どは福井で百姓をしておりました。昼間に芋を育て、夜は兄の遺していった法律の本を読む毎日でした。大学の講義へは実はあまり顔を出しておりませんので、京都大学出身ですと威張れるものではありません。

私の京大時代は、こうした時代でした。

わが国が世界的な競争において危機を迎えている今、本学の皆さんが果たすべき役割は実に大きなものがあります。皆さんが平和に研究や勉学に励むことのできる時代を大変幸せに感じますのと同時に、決して楽観の許されない将来に向けて、国を支え、平和を支える人材を本学が一人でも多く輩出することを切望する次第であります。

(たつみ そとお (株)三井住友銀行特別顧問 昭和22年法学部卒)

## 随想

## 歴史的機器の保存について

名誉教授 加藤 利三

10月2日から12月27日までの日程で、京大総合博物館において平成14年度特別企画展として、「近代日本を拓いた物理実験機器」の名称で、旧制第三高等学校由来の物理実験機器と明治・大正期物理教育教科書などが展示されている。この展示は好評で特に高校生や大学生に人気があると聞く。これらの展示機器や資料は、平成2年に退官された木方洋名誉教授（総合人間学部）や川合葉子（元総合人間学部助手）、鉄尾実興資（総合人間学部技官）および永平幸雄（京大卒、大阪経法大教授）等の各氏により約15年前から整理、保存されてきたものである。これらのグループの方達は往時の備品購入台帳や「舎密局～三高資料室」の古文書および「資料神陵史」などとの照合、分析作業を地道に続けてこられ、日本物理学会や「科学史研究」などにその研究成果を発表されてきた。この研究は今日も続けられており、その成果の主要部分は昨年7月京都大学学術出版会より「近代日本と物理実験機器 - 京都大学所蔵明治大正期物理実験機器」（永平幸雄・川合葉子編著）として出版された。この活動は関係学会でも注目を集め、日本各地で種々の機器や資料の収集・整理と、これを理科教育に役立てようという機運を生み出した。昨今の新しい実験機器は殆どが電子化されており、入力に対しデジタル化された出力が簡単に出るという便利なもので、機器の内部はブラックボックス化されており、機器の原理や構造は全くわからないものが多い。三高由来の歴史的機器の多くはその構造が分かり易く、機器の物理的原理が極めてよく理解できるので、往時の実物に接することの歴史的興味に加え、理科教育の面でも十分役立つと考えられる。実際、金沢大学では、旧制第四高等学校の物理実験機器が1,100点以上保存、整理されたようだが、その内約100点が同大学博物館に常設展示されている。他の約1,000点は石川県教育



委員会に寄贈され、同県の高校理科教員有志が理科教育に役立てるべくボランティア活動により動態保存の努力を続けておられると聞く。

筆者は平成8年に定年退職したが、退職の前後に半年ほどかけて研究室と身の周りの整理を行った。その際、担当の放射物理学講座や物理教室内に残っていた創立以来の物理実験機器を多数収集・整理した。幸い一部の備品台帳が残存していたので、これとの照合も行った。顧みるに、昭和36～40年の理工系倍増期に物理学科は講座数や学生数がほぼ倍増し、建物も増改築されたが、資格面積に縛られ、教室は狭隘をきわめた。このため多くの古い実験機器が放出・廃棄された。当時若手の助手であった筆者は、勇んで古い機器を中庭に放出した。これを先師内田洋一先生に見咎められ、「これは歴史的に貴重な機器だから元へ戻しなさい」と叱られ、渋々狭い部屋へ持ち帰った。現在理学部物理学教室に保存されている100点以上の歴史的機器はこのようにして廃棄を免れたものが多い。

昨今京大では建物の増改築が盛んに進められており、その際古い機器が廃棄されるのが見受けられるようである。また講座担当者が定年退職される際にも、古い機器が廃棄されることがあると聞く。筆者の経験からみても、現役の研究者にとっては眼前の研究活動が忙しく、古い機器の保存整理に携わっている余裕はないと思われる。このため、むざむざ歴史的な機器が廃棄されていくのが惜しまれる。これらの機器を選別し、保存整理しておくならば、将来京大総合博物館の技術史分野が拡充された場合、貴重な資料となるであろう。このことも見据えて、歴史的機器の保存のために学内に適当な窓口を設けて、情報収集と、保存のための然るべき方策が講じられることを望むものである。

（かとう りそう 元理学部教授、平成8年退官、専門は光物性物理学）

## ポスドク考

名誉教授 鬼頭 誠

退官後、1960年代に研究生生活を過ごしたフィラデルフィアの日々を時々懐かしんでいます。当時はベトナム戦争が泥沼化し、米国社会は騒然としていました。ヒッピーが登場し、新しい文化が創成され



つつありました。生命科学の分野ではマグマがふくれ上がりつつありました。研究の第一線を支えたのはポスドク (post-doctoral fellow) であり、世界中から集まってきました。日本の国立大学からは公用出張でくる人、休職してくる人、辞職してくる人などがありました。後者は日本でポストが用意されない限り、米国などで生活の場をみつけなければならず、つらい状況に置かれていました。そのまま永住した人もいます。その頃日本では、博士課程を修了した研究者の就職が困難で、オーバードクターが深刻な問題となりつつありました。

現在、国立大学では定員削減が進み研究補助員が激減し、助手のポストも減り教授の員数が増えました。大学によっては教授8名に対して助手2名というような、実験科学系にあっては信じられないようなことが起こっております。まさに致命的な研究環境といっていいいでしょう。しかしながら、研究費は増加傾向にあります。科学立国を目指し、日本の将来の繁栄のために高額の研究費が投入されつつあります。現在、私はいくつかの機関で研究助成の選考に関わっておりますが、1件当たり1年間に約1億円の研究費を5年間助成するというケースが増えていきます。25~30倍の難関をくぐり抜け、ヒアリングで最終決定ということになりますが、この場合、いずれのプロジェクトも複数名のポスドクを要求しております。つまり、ポスドクが居なければ研究の遂行が困難となる状態になっているということです。まさに欧米並になってきたということでしょう。国立大学は独立行政法人化で大変な時期にあります。その時にあって、「21世紀 COE プログラム」は世界

最高水準の研究拠点を目指しており、1拠点当たり1億円を5年間保障しております。拠点を構成する教官が10名だとすると1人当たり1,000万円、20人だとすると500万円程度にしかありません。しかし、ポスドクを確保することは可能ですから、研究遂行に最も必要なものを手に入れることができるようになります。現在実働中のポスドクは大変な数にのぼっております。内訳をみますと日本人だけではなく、外国人も加わっています。問題は日本人の場合です。プロジェクトが終了した時点で次の就職がどうなるのかということは大変重要なことです。先に述べましたように、若手研究者用のポジション(助手など)が減少しており、大学への就職は極めて深刻な状況におかれていることです。企業では、高度に専門化された比較的高齢のポスドクの受け入れには消極的です。生命科学分野に限っていえば、この分野に関連する企業の絶対数がそれ程多くないことも問題です。1960 - 1970年代に深刻であったオーバードクター問題と同じような問題がぶり返されるのではないかと心配されます。これでは一将功なり万卒枯るような状態になるのではないかと気になります。このような状況を打開する方策の1つとして、教官の任期制も考慮に入れることが肝要かと思えます。一定期間毎の評価をその裏づけとすることが必要なはいうまでもありません。論文の数ではなく、質を評価することに尽きます。COE 確立のためにも避けて通れないことのように思われます。繰り返しますが、わが国では大変な額の研究費が投入されております。受け皿はほとんどが大学教官です。それだけに大学の置かれた立場は責任の重いものと考えます。日本の将来のためにも内向きにならずアグレッシブに前進していただきたいと願っております。

(きとう まこと 元食糧科学研究所教授、平成10年退官、専門は脂質生化学)

## 洛書

### らくがき

????

若い先生から、「是非とも先生に」、「先生しか」、とあれやこれやおだてられ、「そうか」と陥落しました。「何でもいいから楽しそうなことを書くように」と頼まれ、「落書き」を辞書で引いてみましたら、「本来書いてはいけない所にいたずら書きをすること。また、そのいたずら書き。」とありました。落書きとは本来スリングな作業のはずですが、理解したとたん、いただいた菜には「書いてはいけないこと」が書いてありました。皆様、昨今は多忙な日々をお送りと拝察し、のんきな話を一筆啓上申し上げます。

私の人生はスマートではありません。二桁以上の引越しと市販履歴書では行数の足りない履歴、たとえば少し納得していただけますか。「苦労はあったが楽しいことも…」とおっしゃる方も多いのですが、たいがいは苦労ばかりです。「お子様のことやら…」と同情いただけることも多いのですが、それはそうとしても長い年月をかけて身につけた「こだわり」を満足させるのが大変なのです。宇治には6年前に赴任しました。宇治へは学生時代に一度行ったきりですし、隅々まで満足のいくまで探求・冒険するにはそれ相当の時間と経費を要しました。今では一応たいいていのことは「こなせる」つもりですが、昨今の大学を取り巻く環境というやつのお陰で忙しくなったせいでしょうか、「武士のやせ我慢」とはいきません。いい所のようにもあるし、何がいいのかまだ釈然としないのです。いつものことですが。

それでは、「お前の人生の中で何か満足にまっとうしたことはあるのか」と問うてみると、これが一つあるのです。釣りです。旬のころ、大地に足を踏ん張り、魚と一対一で対峙する釣りです。釣りはこだわりの権化みたいなやつで、釣りの道具はハイテク満載のアイデアの宝庫です。何とか隣の人よりも、と思うモチベーションの凄まじさが凝集した世界です。また妙に芸術を軽んじないところがよろしいのです。昭和45年に修士課程を出てある会社に奉公しました。日本があわただしく経済発展を遂げたころで、給料と物価がえらい勢いで上昇した時代です。面食らうほどの勢いでした。そのうちオイルショックに日本中が壊滅的打撃を受け、「研究はいいから草むしりを」と傷つきやすい若者を追い込んだ会社

を辞めるまで、山口のとある工業地帯にいましたが、大変のんびりしたところで、やたらと酒を飲んでおりました。その合間に、三交代のおじさんたちに伝統的釣りの手ほどきを受け、チヌだメバルだと繊細なやつを習いました。これが「こだわり」と「日本的芸術もどき」との腐れ縁の始まりです。少し講釈をさせていただきます。メバルは、細く軟らかいのベ竿を使い、太いほうから5種類ほどの糸をつないで最後は溪流釣りの細さまでにする、糸には一番小さな鉛を一個だけ打つ、といった具合です。真冬の夜、静寂の中（当たり前です。こんな物好きはそうざらにはいませんから。）で、あめ色の田えびを餌にひたすらアタリの瞬間の「糸鳴り」を待つのです。厳寒の静寂の中で自分ひとりしか聞くことのできない一瞬の弦の響きを、です。一度試してください。二度と抜けられなくなりますから。チヌ釣りでは、背丈に満たないような浅瀬で、それも漁師の家の裏あたりで、鉛も打たない細い糸に大きな本虫を1本がけにして、餌を潮の流れに任せながら、ひたすらアタリを待ちます。月のない秋の夜です。静寂の中で伝統の奥深さを感じつつ、マツタケ・チヌを考えるわけです。当時のご自慢は、自称その昔女郎屋のオーナーだった釣具屋のおやじに鮎竿を丹念に細工して作ってもらった7メートルを超える中通し竿でした。こいつで夜な夜なチヌを泣かしたもんです。時折、研究室に置いた当時のリールを眺めては、あののんびりした時の流れを思い出します。何がしかの将来への不安は今も変わりませんが、今とはえらい違いです。

串本付近のグレは40数センチになります。宇治に就てからも時々出かけておりましたが、今年の冬はとうとう一度も行くことができませんでした。歳のせいか焦ったりもしますし、この冬は、と思っております。荒磯で一日立ってられるうちが勝負です。

誰が書いたか解っている落書きは落書きではありません。スリルもないし、面白くもありませんが、書いたことも適當すぎてまことに面目ありません。ただ、原稿を提出する今朝はヤマガラの大群が庭を訪問してくれ、周りの紅葉も例年になく美しく、これから何かいいことでもおきそうな気がいたします。ご自愛多々。

(???? 国際融合創造センター・エネルギー理工学研究所教授)

## 資料

## 平成14年度京都大学市民講座講演要旨

本年度の京都大学市民講座は、「いきる」を共通テーマとして、10月19日及び26日の土曜日の午後、2回にわたり法経第七教室において開講した。

講義科目と講師は次のとおりであった。

稲とともにいきる	東南アジア研究センター教授 田中 耕司
健康老化は人類の夢？	医学研究科教授 鍋島 陽一
さかなを食べているということ - 食卓のさかなから「いきる」を考える -	アジア・アフリカ地域研究研究科助教授 岩田 明久
ストレスに抗して生きる - 細胞の環境適応戦略	再生医科学研究所教授 永田 和宏

なお、講演要旨を以下に掲載する。

## 稲とともにいきる

東南アジア研究センター教授 田中 耕司

この数年、米にかかわっているいろいろと驚かされることがあった。「平成の米騒動」のとき、緊急輸入されたタイ米が、結局、売れ残ったために不法投棄されたというニュースが新聞等で報道された。タイでは「高級なタイ輸出米を投棄している日本」という見出しで大きくとりあげられた。一時的にせよ、対日感情がかなり悪くなったにちがいない。

もう一つ、ショッキングな情報があった。国連食料農業機関(FAO)の報告に掲載された世界各国で消費される主要食料の国別分布図である。驚いたことに、日本は中南米諸国と同じくトウモロコシをもっとも主要なエネルギー源として利用する国に分類されていた。「現実的ではないが、統計分析上は」米ではなくトウモロコシを日本人はもっともたくさん消費していることになっているらしい。

ところが、京大での授業や他大学での集中講義の機会に、日本の農村風景や日本の食事について受講生にアンケートをとると、必ずかえってくる答えは、水田の風景であり、ご飯と魚と野菜のおかずからなる日本の昔からの食事である。おおかたの人は、日本は豊草原瑞穂の国、日本の主食は米と思っているようだが、その実際はどんどん変化している。

こんな変化のなかにありながらも、日本が東アジアから東南アジアを経て南アジアにつづく「アジア

稲作圏」の一員であることはいまも変わりがない。

「稲とともにいきる」人々が少なくなりつつあるとはいえ、文化・社会・経済など生活にかかわるあらゆる側面で日本人は米に大きく依存している。

諸説があるが、約1万年前に中国南部から東南アジア大陸部に広がる熱帯・亜熱帯地域のどこかでイネ(*Oryza sativa*)が栽培化された。その後、アジアの各地に伝播して現在のアジア稲作圏が形成された。各地への伝播にともなって、その土地の自然条件にあったさまざまなタイプの稲作が成立した。日本では、先祖代々の水田を守る人たちがアジアでもっとも緻密な稲作技術を発展させた。それがアジアにおける稲作の「緑の革命」の技術的な基盤となった。ところが、こうしたアジアへの日本の貢献はあまり知られていない。アジア稲作圏の多様性のなかで日本の稲作はどんな位置を占めているのか。アジアの一員たる日本を再考するためにも、稲とともにいきるアジアの人たちへ眼を向けてみることの意義は大きいと思われる。そうすれば、きっと、いまの日本がどういう状況にあるのかが一層よく見えてくるはずである。

アジア各地では、経済のグローバル化にともなうさまざまな変化が起こっている。ひと昔前の稲作がすっかりすがたを変えてしまったところも少なく

い。一方で、比較的古いすがたをとどめている地域もある。変化のなかにあるアジアで「稲とともに生きる」人々が、経済発展や環境問題などのグローバ

ルなさまざまな課題にどう直面しているのか、アジア稲作圏でのフィールドワークから考えてみよう。

## 健康老化は人類の夢？

医学研究科教授 鍋島 陽一

### 老化研究：最近の進歩

有史以来、老化を免れることは人類の夢であり、加齢に伴う変化について多くの知識を蓄積してきた。その記載によれば、老化は加齢に伴う生理機能の減退に伴う複合的な過程であると捉えられている。我々の一生は進化の歴史に深く彩られている。ヒトは海に誕生した生物より進化した。海から淡水へ、陸上へと進出する過程で幾つかの重要な機能を獲得した。肺呼吸、電解質バランスなどはその代表であるが、この高度に発達した機能の副次的な事象や破綻が、老化や加齢に伴う疾患の発症の重要な要因ではないかと考えられている。

酸素呼吸をする生物は細胞内の酸素を水に変換し、同時にミトコンドリアを発達させることによって酸素分圧を下げる作戦（酸化的リン酸化）に成功し、今日に至っているが、生理的酸素濃度においては15%の酸素分子が活性酸素として漏出され、蛋白質、脂質、核酸などに酸化的損傷を与えることは回避できない。酸素呼吸をする生物の宿命として活性酸素の発生とそれによる障害、即ち「ダメージの蓄積とそれを取り除くシステムのバランス」が細胞、個体の老化、寿命を決める重要な決定要因となっている。

### Klotho：思わぬ発見、道半ばの機能解析

ヒトの多彩な老化症状によく似た変異表現型をもつマウスを発見し、原因遺伝子 *Klotho* を同定した。*Klotho* とはギリシャ神話の運命の3女神の一人である。「生命の誕生に立ち会い、生命の糸を紡ぐ女神」の名前である。*Klotho* 蛋白はカルシウムホメオスタシスの制御因子であり、*Klotho* 遺伝子を欠失したマウスでは動脈硬化、異所性の石灰化、骨密度の異常などの変異症状が顕著である。カルシウムなどの電解質は生体内のあらゆる現象の制御に関わっており、その濃度を厳密に保つことなしに、ヒトは生存することができず、その恒常性を保つ極めて精巧なシステムを発展させてきたが、一方で、その破綻が加齢疾患の発症、個体の死に深く関わることとなったことを示唆している。

ヒトの寿命は120年

私はふとしたきっかけで老化、死を研究対象の一つとすることとなった。幸いなことに、私はこの研究を始めたことによって、120年のヒトの寿命のこと、老いを迎えた人間にとって生きる意義とは何かを問い続けることを強られる楽しい？日々を送ることとなった。時には逃れることのできない老いを考えてみるのもよいのではないだろうか。

## さかなを食べているということ

- 食卓のさかなから「生きる」を考える -

アジア・アフリカ地域研究研究科助教授 岩田 明久

私達は普段からさかなを食べている。日本人のさかな離れの傾向が進んでいるが、それでもタンパク質摂取量の多くを水産物に依存していることに変わりはない。日本の漁業生産量自給率はすでに6割をきり、それに替わって国外から夥しい量のさかなが

輸入されている。商品名や加工技術の点からも、私達は今食べているさかなの種類を正確に言えなくなってきたというのが現状だろう。そして、国内産・国外産を問わず、食卓をみていると、いろいろな事柄の集合体として、さかなが今ここにあると

ということが分かってくる。例えば、養殖業による餌や排泄物による環境への負荷及び病気に対する薬物投与による魚体への残留と周囲への拡散、養殖場増設と環境の関係、他水域からの放流による生態系への影響、放流事業による遺伝的变化、天然魚での周囲の環境からもたらされる化学物質の蓄積、対象魚種の資源量、混獲状況などといった対象生物やそれを取り巻く生物的・非生物的環境に関する事例からはじまり、養殖業・漁業の経営状況、輸入による国内産業の影響、国外への企業進出と地域住民の生活の変化などといった人間社会の問題にも関係してくる。さらに、資源問題・環境問題・健康問題などに関わるこれらの事柄のどれもが独立しているわけではなく、国際的な規模で複雑に絡み合っている。

もうひとつ、ここで話したいのは、私達が購入するさかなの殆どが既に調理・加工されていて、畜産の肉類とともに「切り身」をとおしてしかそれに接する機会がないということである。私達の生活スタ

イルは、今食べているものが生き物なのだという感覚はおろか、自分達は生き物を食べていきているのだという現実すらもどんどんと忘れさせる方向に進んでいるようである。「生命の連なり」が分からなくなることで、最近の、人間の命をなんとも思わないような犯罪が多発していることと、なにか関係しているように思えてならない。ましてや今盛んに叫ばれている生物多様性とその保全など自分達とは関係のないことのように思えてしまう。実は、さかなを自分でさばくことは「生き物とは・命とは何か」ということを一番身近に感じることでできる行為なのではないだろうか。

東南アジアの人々も日本人と同様にさかなを沢山食べている。しかし、日本人の利用のあり方とは決して同じではない。今私達がさかなを食べているということとはどういうことなのか、それに関わる様々な事例を紹介しながら、「いきる」ということについて考えたい。

## ストレスに抗して生きる

- 細胞の環境適応戦略

再生医科学研究所教授 永田 和宏

現代人はさまざまなストレスにさらされて生きている。肉体的、精神的ストレスに加えて社会的ストレスなどもあるが、私たちの体を作っている個々の細胞にも、じつは時々刻々ストレスがかかっている。このストレスに抗して生きていくために、細胞はその小宇宙のなかに、信じられないほどに巧妙な環境適応戦略を発達させてきた。

細胞にかかるストレスは千差万別である。身近なところでは発熱は大きなストレスになる。ヒ素や重金属などの毒物を取り込んだり、脳虚血、心虚血などの虚血、さらに炎症なども細胞にとっては大きなストレスである。このようなストレスは、その原因はさまざまであっても、どれも細胞内の種々の蛋白質の変性を引き起こすことで細胞を死にいたらしめる。

たとえば細胞に熱がかかる。そうすると蛋白質は変性してしまう。ちょうど生卵がゆで卵になるようなもので、これは変性した蛋白質が凝集するからで

ある。生きた細胞の中で、ゆで卵のような凝集ができれば細胞は死んでしまうから、この凝集を抑えなければならない。

そこで、このようなストレスにさらされたとき、細胞はただちにストレス蛋白質と呼ばれる一群の蛋白質を合成する。ストレス蛋白質は熱などのストレスによって変性しかかった蛋白質に作用して、変性を抑え、あるいは変性した蛋白質を再生させる救世軍のような蛋白質である。実際にこのストレス蛋白質を多く作るようにしておいてやると、脳虚血などの後で神経細胞の死をある程度防ぐことができる。

このような外部からのストレスがかからないような状態でも、細胞のなかでは常にストレス蛋白質の仲間が活躍している。その代表的な例が、蛋白質の品質管理である。人間には約60兆個の細胞があるが、その1個1個の細胞の中で、毎秒何万個もの蛋白質が合成されている。こんなにたくさん作っているのであるから、必ずしも正しい蛋白質が作られているとは限らない。そこで個々の蛋白質が正しく作られ

ているかをチェックする品質管理の機構を発達させてきた。たとえば、不良品を見つけるとそれを再生させる機構があり、作っても不良品しかできないような状況下では、生産ラインをストップしてしまう機構もある。さらに、たまってきた不良品は、廃棄処分しなければならないが、そのための分解機構もあり、それでも駄目な場合には、細胞自体を自殺に追いやって、不良蛋白質を作るような細胞を排除す

るという最後の手段に訴える。

まことに工場における製品の品質管理と同じような機構が、60兆すべての細胞に備わっているのである。これに異常が生じると、アルツハイマー病やハンチントン病を初めとする神経変性疾患が起きたり、またプリオン病と総称されるクロイツフェルト・ヤコブ病や狂牛病などの原因になる。

## 平成14年度 教育改善推進費（学長裁量経費）による研究課題

本年度の教育改善推進費（学長裁量経費）については、下記の28件が採択されました。採択された研究課題及び代表者等は次のとおりです。

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
全学共通科目（外国語）履修予備登録のシステム改善	総合人間学部 教授 林 哲介	
公務員養成と法学・政治学教育の在り方	法学研究科 教授 真淵 勝	
卒後臨床研究必修化に伴う救急部臨床研修の改善プロジェクト	医学部附属病院 教授 北 徹	
アーリーエクスポージャー・システムの導入による新入学部生の学習意欲活性化・能力開発の試み	農学研究科 教授 吉川 正明	
環境マネジメント専攻長期海外インターンシップの運営システム改善プロジェクト	地球環境学堂 教授 内藤 正明	
新法令に対応した放射線取扱者のための教育訓練用教材作り	放射性同位元素総合センター 教授 五十棲泰人	R I 取扱全部局
体験型ポケットゼミ“ミツパチ科学”の新規開講に向けて	生態学研究センター 教授 清水 勇	
第2回大学教育研究集会及び第9回大学教育改革フォーラムの実施	高等教育教授システム開発センター 教授 田中 每実	
近代日本を拓いた物理実験機器 - 三高コレクションと物理学教科書から探る -	総合博物館 館長 瀬戸口烈司	総人
講義アーカイブ公開システムの構築	学術情報メディアセンター 教授 美濃 導彦	高等セ
平成14年度京都大学宇治キャンパス公開2002	化学研究所 教授 磯田 正二	エネ研・木研・防災研・宙空セ・農・工・エネ科・情報学・低温
現代中国に関する教育・研究基盤整備	人文科学研究所 教授 岩井 茂樹	総人
全学共通科目の学習に必要とする学生用図書及び大学院生の研究を支援する専門参考図書の充実整備	附属図書館 館長 佐々木丞平	全学部
留学生の科目履修のための情報資料提供	附属図書館 館長 佐々木丞平	全学部
法定外公共物の所管換等に伴う作業の外部委託	経理部 課長 安養寺浩二	全部局
対話型教育評価・授業評価の開発・試行	企画・調整専門委員会 調整評価小委員会 委員長 八木紀一郎	学生部、総人、高等セ
広報活動の充実に向けた学外広報誌の発行について	広報委員会 副委員長 森本 滋	
映像による大学案内の作製について	総長補佐 森本 滋	
国際教育プログラム（KUINEP）の充実	留学生センター センター長 鈴木健二郎	総人・文・教・法・経・理 外
京都大学上海センタープロジェクト	経済学研究科 研究科長 下谷 政弘	経研・東南セ・留学セ

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部署
医工連携による生命科学新領域開拓プロジェクト	医学研究科 教授 本庶 佑	工・情報学
アフリカ地域研究のオンライン化 - インターネットによるフィールドワーク支援 -	アジア・アフリカ地域研究研究科 教授 市川 光雄	
大学への環境管理システム導入の検討	環境保全センター センター長 橋本 伊織	工・施設部
国際融合創造センターの将来構想 - IIC フェア継続開催 -	国際融合創造センター センター長 松重 和美	
ジョイント国際シンポジウム「『自然という文化』の射程」と「歴史学の現在を問う」	文学研究科 教授 紀平 英作	
戦時下における京都大学についての基礎的調査及び研究	大学文書館 館長 佐々木丞平	
生活習慣病予防の教育及び実践	人間・環境学研究科 教授 森谷 敏夫	医・農
極低温を利用したナノ構造・物性解析	理学研究科 教授 水崎 隆雄	

## 平成14年度学術研究奨励金による研究課題

本年度の学術研究奨励金については、下記の20件（人文・社会系 1 件，理学・工学系 9 件，医学・生物系 10 件）が採択されました。

採択された研究課題及び研究者は、次のとおりです。

### 【人文・社会】系

研究課題	所属・職名・氏名
古辞書の研究 - 図書寮本類聚名義抄の和訓を中心に -	文学研究科 助教授 大槻 信

### 【理学・工学】系

研究課題	所属・職名・氏名
新種のブラックホール - 中質量ブラックホール - の X 線観測研究	理学研究科 助手 松本 浩典
二重周期アクティブフォトニック素子に関する研究	化学研究所 助手 島田 良子
[ 60 ] フラーレンを基体とした新規環境修復材料による内分泌攪乱物質の光分解に関する研究	地球環境学堂 助教授 津江 広人
金ナノロッドの化学調整と界面配向制御	国際融合創造センター 助教授 小山 宗孝
モット絶縁体・超伝導体における一軸性ひずみ効果	理学研究科 助手 前里 光彦
植物二次代謝物質・クマリン誘導体生合成の解明と植物生理学的役割	化学研究所 助手 清水 文一
オゾンを用いた異常高原子価鉄イオンを含む酸化物の合成と物性・応用に関する研究	総合人間学部 助手 林 直顕
地球近傍プラズマ環境の太陽風によるコントロールについて：宇宙天気予報への応用	理学研究科 助手 能勢 正仁
開口フルラーレンを用いる内包フルラーレン類の合成	化学研究所 助手 村田靖次郎

### 【医学・生物】系

研究課題	所属・職名・氏名
生体分子モーターの運動機能と構造揺らぎの関係を明らかにする	理学研究科 助手 西山 雅祥
H I V - 1 タンパク質 R e v による m R N A 核外輸送機構のスイッチングに関する研究	ウイルス研究所 助手 片岡 直行
E S 細胞を用いた新しい心血管分化誘導系の構築と再生医療応用	医学研究科 助教授 山下 潤

研 究 課 題	所 属 ・ 職 名 ・ 氏 名
白色脂肪組織形成における F G F 10 の役割の解明	薬学 研究科 助 手 小西 守周
成体における膵内分泌前駆細胞の同定	医学部附属病院 助教授 南 幸太郎
霊長類 E S 細胞由来神経細胞を用いた脳梗塞の治療	医学部附属病院 助 手 高木 康志
ゴルジ体内に貯蔵される亜鉛の生理機能の解明	生命科学 研究科 助 手 神戸 大朋
DNA チップを用いた飼料に含まれる動物性素材の高感度判別法の検討	農学 研究科 助 手 河内 浩行
がん転移抑制遺伝子 R E C K の生体内における過剰発現の効果に関する研究	医学 研究科 助 手 高橋 智聡
日本に生息するサソリからの昆虫特異的ペプチド毒素の単離・同定	農学 研究科 助 手 宮下 正弘

## 平成14年度学術出版助成金による研究課題

本年度の学術出版助成金については、下記の1件が採択されました。

採択された研究課題及び研究者は、次のとおりです。

### 【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 名 ・ 氏 名
現代政党システムの変容：90年代における危機の深化	法学 研究科 教 授 的場 敏博

## 日誌 2002.10.1 ~ 10.31

- |   |   |
|---|---|
| 10月1日 同和・人権問題委員会  | 16日 国際交流委員会                                       |
| 7日 学生部委員会   | " 京都大学春秋講義（秋季講座）水曜講義<br>（以後23日、30日、11月6日及び13日に開催） |
| 8日 評議会  | 19日 京都大学市民講座（引き続き26日に開催）                          |
| 15日 Ola ROMÁN 国立スウェーデン大学協会<br>シニアアドバイザー他3名来学，総長他<br>と懇談 | 21日 広報委員会   |
| " 京都大学春秋講義（秋季講座）月曜講義<br>（以後21日、28日、11月5日及び11日に開催）       | 22日 大学院審議会  |
|   | 23日 環境保全委員会                                       |
|   | 30日 Francis WALDVOGEL スイス連邦工科大学理事長他1名来学，総長他と懇談    |

## 訃報

このたび、<sup>とやま</sup>外山 <sup>ただし</sup>義工学研究科教授が逝去されました。  
ここに、謹んで哀悼の意を表します。  
以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

## 外山 義 工学研究科教授



外山 義先生は、11月9日  
逝去された。享年52。

先生は、昭和49年東北大学  
工学部建築学科を卒業後、公  
共施設研究所で病院設計実務  
に携わった後に、同57年ス  
ウェーデン王立工科大学に留学され、建築機能分析  
研究所で高齢者の居住環境に関する環境心理学的研  
究に取り組み、同63年に同大学 Ph.D. を授与された。  
平成元年に帰国し、厚生省国立医療・病院管理研究  
所地域医療施設計画研究室長、東北大学大学院工学  
研究科助教授を経て、同10年より京都大学大学院工  
学研究科環境地球工学専攻教授に就任。痴呆性高齢  
者グループホームのケアと空間構成、特別養護老人

ホームの個室化等に関する研究・設計等に取り組み  
られた。

主な著書に「クリッパンの老人達 - スウェーデン  
の高齢者ケア」、「スウェーデンの住環境計画」、「グ  
ループホーム読本 - 痴呆性高齢者ケアの切り札」な  
どがある。論文「高齢者の自我同一性と環境 - 生活  
拠点移動による環境適応に関する研究」により、平  
成2年度日本建築学会奨励賞（論文）受賞。高齢者  
施設の設計においては、「おらはうす宇奈月」（平成  
8年度）、「ケアタウンたかのす」（平成12年度）、「痴  
呆性高齢者グループホーム楓&メイプルリーフ、地  
域交流センターならのは俱樂部」（平成13年度）で、  
それぞれ医療福祉建築賞を受賞された。

（大学院工学研究科）

## 公開講座

### - 終了報告 - 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座を開催

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する  
教育問題への取り組みの一環として、現代人の心  
の理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年は、ユング派分析家の Wolfgang Giegerich セ  
ンター客員教授と河合俊雄助教授を講師として「『無  
意識の心理学』の論理に内在する密輸」と題し、10  
月20日（日）午後1時から、京大会館で行われた。定  
員を上回る申込みで、心理臨床専門家のみならず、  
教育関係者や大学院生、学生など61名が参加した。

講演では、Giegerich 氏の緻密でかつ斬新な理論  
的展開と、河合氏による逐次通訳・コメントによっ  
て、真摯に無意識や夢など心の深層に触れていくこ



との重要性が示された。後半の質疑応答では、難解

であるが多くの刺激を受けた参加者から活発な質問・意見が出され、文化や歴史を含めた現代人の心へのアプローチがフロア全体で試みられた。

毎年、参加者からは好評を得ており、今後も、複雑な心の問題を理解していく上で不可欠な、人間の

存在自体を見つめ直すことに繋がるテーマが話し合われる貴重な機会となるよう公開講座を開いていきたいと考えている。

(大学院教育学研究科)

## 話題

### 花山・飛騨天文台同時一般公開を実施

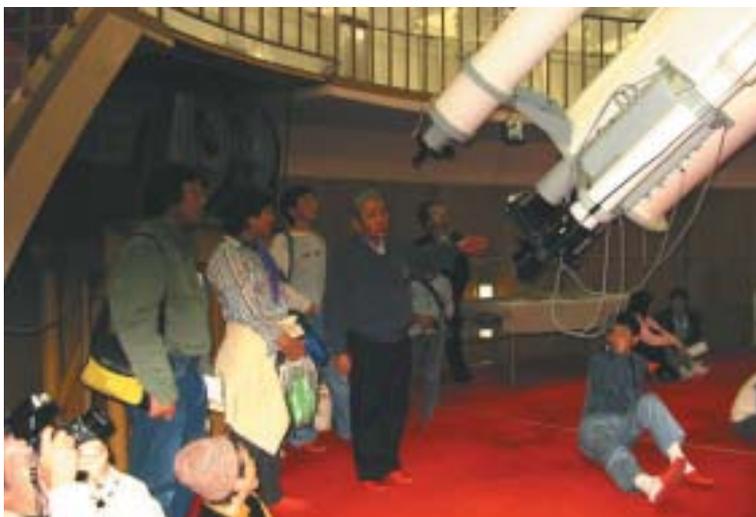
理学研究科附属天文台では、花山天文台と飛騨天文台の同時一般公開を、今年度は9月28日(土)に実施しました。望遠鏡観測装置の説明や研究成果の紹介などに加えて、二つの天文台をオンラインで結んで、相互に太陽や惑星の画像を送信して、参加者からの質問に遠隔地からも応答するデジタルライブが行なわれました。

また、ホットな研究紹介のポスター展示や昔の観測装置を置く天文台歴史館がセットされ、いくつかのミニ講演会が行われて、ここでも参加者からの熱心な質問が受け付けられました。更に、「彗星を作ろう」、「七色のスペクトル分光器を作ろう」、「星座早見・プラネタリウムを作ろう」などの工作教室や、「クイズラリー」などの参加型のコーナーも設けら

れました。今年はいにく天候には恵まれず、大型望遠鏡による天体観望は出来ませんでした。それでも花山天文台では約500人、飛騨天文台では約100



花山天文台45cm 屈折望遠鏡の説明



飛騨天文台65cm 屈折望遠鏡の説明

人の、小学生からお年寄りまで幅広い方々の参加があり、上記のようなバラエティーに富んだコーナーはどれも大変好評でした。これらのコーナーの多くは、大学院生と機関研究員(ポスドク)や若手の非常勤職員を中心にして企画準備されたもので、課題研究・課題演習やポケットゼミなどの学部学生も積極的に役割を分担してくれました。学生諸君にとっても、一般市民に自分の研究成果を自分の言葉で紹介する良い機会になったのではないかと思います。

(大学院理学研究科)

## 総合博物館，コンサートを開催

11月1日（金）の夕刻，総合博物館は，音楽の館に变身した。京都大学ミュージアムコンサートが開催されたのである。コンサートは，総合博物館1階ロビーにおいて，長尾 真総長，本間政雄事務局長，田中義雄（株）J E U G I A社長，笠井英彦（財）ヤマハ音楽振興会専務理事のほか，約150名を招いて開催した。

当館は，博物館と呼ばれるにふさわしい空間を備えた日本初の本格的大学博物館であり，昨年6月1日の開館以来，この恵まれた空間を市民に親しんでもらえるものとするため，学習教室，科学教室，講演会など様々な試行錯誤を行ってきた。その一環として開催したのが，このコンサートである。開館以来，コンサートが構想されてきたが，今回それが実現したのは，館の理念と相通ずる活動を行っているヤマハ音楽振興会西日本支部及びJ E U G I Aをパートナーとして見いだせたからである。

当日は，ヤマハ音楽振興会が主催するヤマハ音楽教室で才能を開花させている，京都周辺在住の小中学生，高校生や，そのOBで京都大学の大学院に学ぶ学生などが創作したピアノ曲，ヴァイオリン曲，

合唱曲などが披露された。館の展示場入り口にシンボルとして据え付けられた直径80cmの巨大なアンモナイト化石に想を得，8500万年前の海をゆったり泳ぐアンモナイトの姿を描いた即興曲，四季を生きてやがて雪のころ樹木から別れて命を終え，次の命を支えるために土に帰っていった「葉っぱのフレディー」の物語を美しく歌い上げ，命の尊さを訴えた歌曲など，自然・文化・生命をテーマとした総合博物館の展示の精神と共鳴するプログラムは，聴衆に深い感銘を与えた。

開館以来，総合博物館では，館長以下「大学博物館は文化施設である」と信じて「社会に開かれた大学の窓口」としての役割を果たそうと日夜模索してきた。今回，同企画が実現したことは，館の教官・職員の地道な模索の真摯さを外部からも認めていただけた表れとして理解したい。そして，これを励みに総合博物館をさらに親しめる博物館として発展させるため，今後も学内外の協力を得ながら努力してゆきたい。

（総合博物館）

## 経済研究所創立40周年記念シンポジウムを開催

本年4月に創立40周年を迎えた経済研究所は，この秋，京都と東京で2回にわたる記念シンポジウムを開催した。

まず10月3日（木）に京都市国際交流会館において，「経済学のフロンティア」をテーマとして開催された。講師は同研究所の3名の教授で，藤田昌久教授が「知識創造社会における産業集積と経済成長 - 空間経済学の視点から - 」，今井晴雄教授が「経済社会のゲーム分析」，刈屋武昭教授が「企業経営と天候リスクデリバティブ」。いずれも日本のみならず世界をリードする「フロンティア」の精神に溢れた講演を行った。

東京では，11月6日（水）に学術総合センター一橋記念講堂において開催された。前半は当研究所の照山博司助教授と柴田章久助教授による「統計データでみる 日本経済は今」をテーマとした，スクリーンを使っての講演，後半は「日本の構造改革 - 何処をどう変えるのか」をテーマに著名なエコノミストや経済学者を招いてのパネルディスカッションであった。

パネリストは元大蔵省国際金融局長で現在慶應義塾大学教授の榊原英資氏，元日本銀行参事で現在慶應義塾大学教授の深尾光洋氏，東京大学教授でマクロ経済理論の権威の吉川 洋氏，野村総合研究所主

席エコノミストの植草一秀氏の4名，そしてコーディネーターは経済研究所長の佐和隆光教授が担当した。

討論は，不況にあえぐ日本経済の現状と展望を，小泉政権にも絡めて鋭い切り口で論じるもので，約500名の聴講者で埋められた会場は終始熱気に包まれた。

両シンポジウムは経済改革を迫られる日本，そして組織改革を目前にした大学にあって，

確かな手ごたえを残すものであった。

(経済研究所)



パネルディスカッション  
(東京会場)

## 原子炉実験所，アトムサイエンスフェアを開催

原子炉実験所では，さる10月27日(日)，科学実験教室，講演会，施設見学を含めた総合的なイベントを「アトムサイエンスフェア」として開催した。このイベントは，若い世代の理科離れが社会的な課題

となる昨今の情勢を踏まえ，地元自治体(熊取町，泉佐野市，貝塚市)の教育委員会等の協力を得て，今年度初めて開催した。

実験教室では，「手作り霧箱による放射線の観察」，

「放射線照射により発生する不思議な光(熱ルミネッセンス)の観察」，「生活環境中の放射線測定」が行われた。また，講演の部では，実験所教授により「おかしな水とおもしろい炭」，「恐竜はなぜ滅んだか?」というタイトルで講演が行われた。

各会場には，親子連れを中心に約50名の参加者が訪れ，熱心な質問が次々と出されていた。

(原子炉実験所)



## お知らせ

## 「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白馬山の家」を、今冬については下記のとおり開設しますので、ご利用ください。

この「山の家」は、雄大な北アルプスの峰々に囲まれた、中部山岳国立公園白馬山麓の梅池高原にあり、降雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

建物は山小屋風の木造地上2階地下1階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室からなっています。

## 記

1. 名称 京都大学<sup>はくぼ</sup>白馬山の家
2. 所在地 長野県北安曇郡<sup>あずみ おたり</sup>小谷村大字千国字<sup>ちくに</sup>柳久保乙869の2  
(交通機関)  
JR大系線「白馬大池駅」下車，松本電鉄バス「<sup>つがいけ</sup>梅池高原」下車，徒歩約20分
3. 開設期間 12月20日(金)～1月10日(金)並びに2月20日(木)～4月10日(木)
4. 収容人員 26人
5. 宿泊費 1泊2食付き 体育会会員2,000円/非会員・教職員2,600円  
プラス暖房費300円
6. 申込み及び問い合わせ先  
体育会事務局(西部構内総合体育館内，電話 学内2574)

## 編集後記

今年の紅葉は近年最高と思える程美しく、全山が黄色とまではいなくても結構綺麗な紅葉の錦織りなす吉田山の麓で、下界では11月祭の明るい声が飛び交っている中での編集委員会でした。

寸言の巽さんの原稿(私の京大時代)を読ませて戴き、戦争に直面していた50年前と比べると、現在の大学の危機とか日本の危機とかは、問題のスケールが小さく、努力すれば簡単に乗り越えられるものかも知れないという感触を得ました。ただ、昔の人に比べると、経済発展の末で、結構成り金ぼけの感がする私達にその力があるかどうかは不明ですが。

(中村記)